

参考文献

- 岩倉国浩1974 『日英語の否定の研究』研究社出版
- 奥津敏一郎1984 「不定詞の意味と文法——『ドッチ』について——」『都大論究』21号(1)―(16) 東京都立大学国語国文学会
- 1985 a 「続・不定詞の意味と文法」『人文学報』173号(1)―(2)東京都立大学人文学部
- 1985 b 「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』23号(1)―(12)
- 太田朗1986 「G B理論について」上智大学言語学会第1回大会講演
- 尾上圭介1983 「不定語の語性と用法」渡辺実(編)『副用語の研究』404-431 明治書院
- 寺村秀夫1979 「ムードと否定」『英語と日本語と』191-222 くろしお出版
- 1984 「日本語のシンタクスと意味II」くろしお出版
- 中右実1979 「モダリティと命題」『英語と日本語と』223-250
- 1980 「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座第2巻文法』157-220 大修館書店
- 1981 「変形と意味の原理」『英語青年』127巻7号2-6 研究社出版
- 1984 「意味論の原理(5)——S—モダリティの意味と形——」『英語青年』130巻5号24-26
- 1985 「意味論の原理(10)——二重否定の発想と論理——」『英語青年』131巻6号 32-34
- 仁田義雄1979 「日本語文の表現類型」『英語と日本語と』287-306

(東京都立大学大学院学生)

後置文に関するオブザベーション

——単文の場合——

大島 資生

1. はじめに

- (1) a やって来たよ、太郎が。
b 火傷しちゃったんです、煙草で。
c かわいいね、コアラは。

私たちは、日常の会話の中で、(1)のような、いわゆる「倒置」のおこった文を非常によく用いる。だが、文中にあるどんな要素でも自由に文尾におくことができるかという、そうではない。小論では、単文中のいくつかの要素について、それを文尾におくことの可否について、また、文尾におくことができない場合にはどのような制約が働いているのか考察してみたい。

なお、以下では(1)のようなパターンを久野(1978)の用語にならって「後置文」と呼ぶことにする。

2. はめ込み

考察にはいる前に、「はめ込み」という概念を導入しておきたい。まず、次のような文をみよ。

- (1) 太郎は行ってしまったよ、東京へ。

この文の話し手には、「東京へ」という後置要素を「行ってしまったよ」にかからせるような意識がある。つまり、あたかも、「行ってしまったよ」の前に「東京へ」を「はめ込む」ような意識がある。また、聞き手も、「東京へ」を「行ってしまったよ」の前に「はめ込んで」解釈していると考えられる。これは、前に発話した語句に後から発話した語句がかかっていくという素朴な意識、すなわち、松下(1928)の言う「逆流」に相当するものである。以下では、上述のような意識を「はめ込み」と呼び、「はめ込」まれるべき後置部分中の位置を Pro で示すことにする。たとえば、(1)は次のようになる。

- (2) 太郎は Pro 行ってしまったよ、東京へ。

3. 各種の要素の後置

3.1. PP と主題

ここでは、「ガ」「ヲ」などの後置詞(Postpositional)にマークされた句(Postpositional Phrase 以下PPと

略), 副詞句 (DP), および主題化された句 (Topic 以下 Top と略の後置についてみてみよう。

- (1) a 太郎がやって来たよ。
b やって来たよ, 太郎が。
(2) a 最近無差別殺人が多いね。
b 最近多いね, 無差別殺人が。

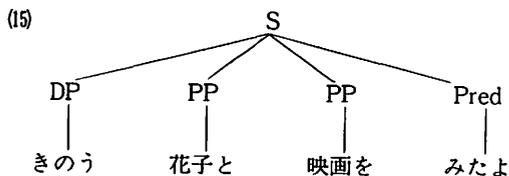
まず, ガ格は上のように後置できる。ヲ・ニ格も同様である。

- (3) a 太郎が花子をコンサートに誘ったよ。
b 太郎がコンサートに誘ったよ, 花子を。
(4) a 太郎がお金を盗んだよ。
b 太郎が盗んだよ, お金を。
(5) a 太郎が花子をコンサートに誘ったよ。
b 太郎が花子を誘ったよ, コンサートに。

上記以外の PP, DP についてもみてみよう。

- (6) a 山田博士が特別な方法でエイズを治したよ。
b 山田博士がエイズを治したよ, 特別な方法で。
(7) a 花子が風邪で学校を休んだよ。
b 花子が学校を休んだよ, 風邪で。
(8) a おととい花子と原宿へ行ったよ。
b おととい原宿へ行ったよ, 花子と。
(9) a 太郎が「俺が馬鹿だった」と言ったよ。
b 太郎が言ったよ, 「俺が馬鹿だった」と。
(10) a スペース・シャトルの残骸が空から降ってきたよ。
b スペース・シャトルの残骸が降ってきたよ, 空から。
(11) a スペース・シャトルの残骸が10キロ先まで飛んだよ。
b スペース・シャトルの残骸が飛んだよ, 10キロ先まで。
(12) a 火曜日に太郎がアメリカへ出発するよ。
b 太郎がアメリカへ出発するよ, 火曜日に。
(13) a きのうち花子と映画を見たよ。
b 花子と映画を見たよ, きのうち。
(14) a 最近無差別殺人が多いね。
b 無差別殺人が多いね, 最近。

上でみたように,



という構造をもつ文の PP, DP のように, Pred (述語) と姉妹関係にある要素は後置ができるのである。

次に Top の後置について考えよう。

- (16) a 太郎は花子をなぐったよ。
b 花子をなぐったよ, 太郎は。
(17) a 人生は浪花節だよ。
b 浪花節だよ, 人生は。

上はガ格の主題化の例である。

- (18) a あのウナギはもう食べてしまったよ。
b もう食べてしまったよ, あのウナギは。
(19) a この道はいつか来た道だよ。
b いつか来た道だよ, この道は,
(20) a アメリカは二回行ったことがあるよ。
b 二回行ったことがあるよ, アメリカは。

(18)(19)(20)はそれぞれ, ヲ格 (対象格・移動格), ニ格 (もしくはハ格) の主題化の例である。このように, Top は後置可能である。

以上をまとめると, Pred と姉妹関係にある PP・DP, および Top は後置が可能ということになる。

3.2. ノ句

次に,

- (1) [NP / NP] NP

という構造 (以下「ノ型名詞句」と呼ぶ) 中の「NP /」(以下「ノ句 (ノ・フレーズ)」と呼ぶ) の後置について考える。この, いわゆる連体助詞の「ノ」については, 「ダ」の連体形とみる立場もある (奥津 (1978) など)。たとえば,

- (2) 僕の本

は, 次のようなプロセスを経て生成されるとするのである。

- (3) a 僕が本を所有している本
b 僕が所有している本
c 僕だ本
d 僕の本

このような立場をとると, ノ句を含む文は実は複文構造をもつということになるが, ここでは伝統文法に従い, 単文として扱うこととする。(後述する数量詞句「Qノ」の場合も同様である。)

3.2.1. 単文中にノ句が一つの場合

ノ句の後置は次に見るように自由なようである。

(()内は, ノ型名詞句のとる格)

- (4) a 太郎の秘書が出かけたよ。(ガ格)
b 秘書が出かけたよ, 太郎の。

- (5) a 次郎が太郎の本をなくしたよ。(ヲ格)
 b 次郎が本をなくしたよ, 太郎の。
 (6) a 田中が鈴木^の弟に反対したよ。(ニ格)
 b 田中が弟に反対したよ, 鈴木^の。
 (7) a 花子が太郎^の車で来たよ。(デ格)
 b 花子が車で来たよ, 太郎^の。

ノ型名詞句がとる格による制約もない。次のような場合はどうだろうか。

- (8) 社長が株を買ったよ, この会社の。

(8)の「この会社の」は「社長」にかかるとも、「株」にかかるとも解釈できるが、直観的には、文末に近い「株」にかかる解釈の方が強いように感じられる。

以下の例も同様である。

- (9) 上役が部下をなくったよ, 僕の。
 (10) 犬が足にかみついたんだよ, 太郎^の。
 (11) 猫がおかずを盗んだよ, 僕の。
 (12) 花子はお金をロッカーにしまったよ, 太郎^の。
 (13) 太郎は秘書に書類を渡したよ, 次郎^の。

これらの例でも、後置されたノ句は非後置部分のNPのうち、文末に近いものの方が結びつけやすいことがわかる。このことは、(5)~(7)の語順を次のように入れかえると若干わかりにくくなることからもうかがえる。

- (14) a 車で花子が来たよ, 太郎^の。
 b 本を次郎がなくしたよ, 太郎^の。
 c 弟に田中が反対したよ, 鈴木^の。

この場合、直観的に復元されるのは、「太郎の花子」、「太郎の次郎」、「鈴木^の田中」というフレーズだが、これらはよほど特殊なコンテキストが与えられないかぎり想定しにくい。(14)の文がわかりにくいのは、さらにさかのぼって、文末から遠いNPを探さなければならぬからだろう。

3.2.2. 単文中にノ句が二つの場合

一文中に二つのノ句がある場合、その両方を後置することはできない。

- (15) a 太郎に僕の召使いが次郎のお菓子をあげたよ。
 b *太郎に召使いがお菓子をあげたよ, 僕の, 次郎^の。

以下では、二つのノ句のうちの一つが後置された場合を考える。

- (16) 次郎のトラックが太郎の自動車にぶつかったよ。
 (17) a ?次郎のトラックが自動車にぶつかったよ, 太郎^の。

- b ??トラックが太郎の自動車にぶつかったよ, 次郎^の。

(17)のaとbには微妙ではあるが、許容度に差があるように感じられる。まず、bから考えよう。bでは、Proと後置されたノ句の間に別のノ句がある。

- (18) Proトラックが太郎の自動車にぶつかったよ, 次郎^の。

つまり、ノ句の後置には次のような制約があると予測できる。

- (19) *……Pro_i……no-ph_j……, no-ph_i (no-ph. :no-phrase)

この制約が意味するのは、(18)を例にすると「次郎の」を「トラック」の前のProの位置にはめ込もうとしても、途中に別のノ句「太郎の」があるために、そこで混乱が生じてしまい、Proまでさかのぼることができないということである。次の例でも同様である。

- (20) a 田中さんの奥さんが鈴木さんの鍵をなくしたのよ。
 b ??奥さんが鈴木さんの鍵をなくしたのよ, 田中さん^の。

次に(17a)である。

- (21) ?次郎のトラックが自動車にぶつかったよ, 太郎^の。

ここではProと後置されたノ句との間にノ句がはさまっていない。

- (22) 次郎のトラックがPro自動車にぶつかったよ, 太郎^の。

したがって、(19)の制約に抵触しないのだが、にもかかわらず、きわめてすわりの悪い文である。これは、次のように考えられるのではないだろうか。つまり、後置されたノ句をはめ込むことにより、「太郎の自動車」というノ型名詞句が復元されるが、非後置部分にはもうすでに「次郎のトラック」というノ型名詞句がある。両者はどちらも「XノY」という同一の構造をもっているため、二者の間で混乱——たとえば後置要素の「太郎の」と非後置部分にある「次郎の」をとりちがえてしまうなど——が生じやすくなる。このためにすわりが悪くなるということである。このことは、非後置部分中のノ型名詞句とProとの距離を離すと次のようにすわりがよくなることからもうかがえる。

- (23) a ?次郎のトラックが突然Pro自動車にぶつかったよ, 太郎^の。
 b 次郎のトラックが突然煙を出しながらPro自動車にぶつかったよ, 太郎^の。

同じような例を加えておこう。

(24) a 田中さんの奥さんが鍵をなくしたのよ、鈴木さんの。

b 田中さんの奥さんがうっかりして鍵をなくしたのよ、鈴木さんの。

上で見たように、ノ句が二つある場合、そのうちの一方を後置した場合、すわりの悪い文が生じるようである。では、次のような場合はどうだろうか。

(25) A高校の教師が教え子の一人娘と結婚したよ。

(26) a 教師が教え子の一人娘と結婚したよ、A高校の。

b A高校の教師が一人娘と結婚したよ、教え子の。

(26)は今まで見てきた例よりも許容度が高いように感じられる。これはなぜだろうか。まず、(26b)から考えよう。(26b)の「教え子」は、前後に特別なコンテキストがないかぎり、「A高校の教師の教え子」と解釈される。つまり、「A高校の教師」に依存する対称詞 (cf. 久野 (1978)) なのである。したがって、「A高校の教師(の)」が「教え子」の前でゼロ代名詞化されている——あるいは、再帰化されて「自分の」となり、それが省略されている——と考えられる。ゼロ化された要素を \emptyset で表わすと、後置要素は (下線部はゼロ化される部分)

(27) [\emptyset 教え子] の ([[A高校の教師] の] 教え子] の)

と表わせるので、はめ込みによって復元されるのは

(28) [\emptyset 教え子] の一人娘 ([[A高校の教師] の] 教え子] の一人娘)

となり ([[Xノ] YノZ]), 非後置部分中にすでにあるノ型名詞句「A高校の教師」(XノY) とは構造が異なることがわかる。このため、両者の間で混同が起らず、適格になると考えられる。次に (26a) である。

(29) 教師が教え子の一人娘と結婚したよ、A高校の。(=(26a))

この場合も、「教え子」は「教師」に依存する対称詞と考えられるので、「教え子の一人娘」は次のような構造をもつとすることができる。

(30) [\emptyset 教え子] の一人娘 ([[教師] の] 教え子] の一人娘)

そして、後置された「A高校の」は文末に近い方のNPつまり(30)にかかるので、次の構造が復元される。

(31) [[A高校の \emptyset] 教え子] の一人娘 ([[A高校の] (教師] の] 教え子] の一人娘)

つまり(31)の \emptyset の位置に「教師(の)」がゼロ化された形で存在しており、後置された「A高校の」は、その

ゼロ代名詞にかかると考えるのである。このようにすれば、後置要素が「教師」にかかることにも説明がつくのではないだろうか。次の例も上と同様である。

(32) その会社の社長が秘書の車で来たよ。

(33) a その会社の社長が車で来たよ、秘書の。

b 社長が秘書の車で来たよ、その会社の。

以上のように、一般に、二つのノ句をもつ文から、一つのノ句を後置するとすわりの悪い文が生じるが、もとの文で、後のノ句中のNPが前のノ型名詞句中のNPに依存する対称詞になっている場合は、許容度の高い文が生じる。このように、ノ句の後置に関する制約には様々な要因がかかわっているようだ。(注1.も参照)

3.3. 数量詞

日本語の数量詞 (Quantifier 以下Qと略) に関して、特に数量詞遊離 (Quantifier Float 以下QFと略) と呼ばれる現象については、従来活発な議論がなされている (奥津 (1969), Kamio (1973), Harada (1976), 神尾 (1977), 柴谷 (1978), 井上 (1978), Tomoda (1982), 奥津 (1983) など)。そして、QFに関する制約については文法関係 (主語, 直接目的語など) と表層の格の両方からの考察が必要であるというのが現在の時点での一応の結論となっているようだ。

ここでは、Qを後置した場合にみられるいくつかの現象について、QFとのかかわりあいを見ながら考察してみたい。なお、QFについては、移動変形と考える立場と、移動変形としてのQFを認めず、たとえば、(1)については「数人」は、QFによってa文の「数人の」が移動されたものではなく、基底部門においてはじめから、c文の位置に挿入されているとする立場 (井上 (1978), Tomoda (1982)) がある。

(1) a 数人の学生が私に会いに来た。

b 学生数人が私に会いに来た。

c 学生が数人私に会いに来た。

また、移動変形と考える立場にも、(1c)の基底形として、(1a)のような「QノNP P」(P:post-positional) パターンを考える立場 (神尾 (1977)) と、(1b)のような「NP Q P」パターンを考える立場 (奥津 (1969), 1983)) がある。ここではそのいずれが妥当であるかという議論には立ち入らず、便宜上、(1c)パターン⁽¹⁹⁸²⁾の文は、(1a)からQFという変形によって生成されたものとして、議論をすすめる。

3.3.1. 単文中にQが一つある場合

従来しばしば指摘されているように、主語からのQFは可能である。

- (2) a 数人の男の子が来たよ。
b 男の子が数人来たよ。
(3) a 二台の車がとまっているよ。
b 車が二台とまっているよ。
(4) a 六匹の猫が寝ているよ。
b 猫が六匹寝ているよ。

これらについてはQの後置も可能である。

- (5) 男の子が来たよ、数人。
(6) 車がとまっているよ、二台。
(7) 猫が寝ているよ、六匹。

また、「Qノ」も後置できる。

- (8) 男の子が来たよ、数人の。
(9) 車がとまっているよ、二台の。
(10) 猫が寝ているよ、六匹の。

同様に直接目的語についてもQFと後置が両方とも可能である。

- (11) a 花子が五個のハンバーガーを食べたよ。
b 花子がハンバーガーを五個食べたよ。
c 花子がハンバーガーを食べたよ、五個／五個の。
(12) a 学生が三匹の猫をなぐったよ。
b 学生が猫を三匹なぐったよ。
c 学生が猫をなぐったよ、三匹／三匹の。
(13) a 田中先生が四人の学生をほめたよ。
b 田中先生が学生を四人ほめたよ。
c 田中先生が学生をほめたよ、四人／四人の。

この他、井上(1978)の言う副目的格——自動詞と必ず共起し、当該の自動詞を下位分類する格——からもQFと後置が可能である。

- (14) a この件に関してサコタ捜査官が数人の専門家にあったよ。
b (1)この件に関してサコタ捜査官が専門家に数人あったよ。
c この件に関してサコタ捜査官が専門家にあったよ、数人／数人の。
(15) a 太郎が数人の女の子にプロポーズしたよ。
b (1)太郎が女の子に数人プロポーズしたよ。
c 太郎が女の子にプロポーズしたよ、数人／数人の。
(16) a 部隊は三つの橋を渡ったよ。
b 部隊は橋を三つ渡ったよ。

c 部隊は橋を渡ったよ、三つ／三つの。

- (17) a その隊商は三つの山を越えたよ。
b その隊商は山を三つ越えたよ。
c その隊商は山を越えたよ、三つ／三つの。

(16)(17)は移動格を示す「を」の例である。

次に、二格の場合はどうか。

- (18) a 生徒が先生にあいさつしたよ、十人。
b 先生に生徒があいさつしたよ、十人。

(18 a, b)の「十人」はいずれも、「生徒」に結びつくように解釈される。これは、次のように、二格からのQFが作り出すa文が不可能ではないにせよ、若干不自然であるので、(18)のような後置文を解釈する際、より自然な文であるb文を復元するためである。

- (19) a (1)生徒が先生に十人あいさつしたよ。
b 生徒が十人先生にあいさつしたよ。

ところが、よく考えてみると、(19 a)の「十人」は——これも若干不自然な解釈ではあるが、——「生徒」にも結びつけうるということがわかる。つまり、(19 a)は次のように二つの解釈をもつのである。なお、{ }はQの領域——Qの結びつく範囲——を示す。

- (20) a 生徒が {先生} に十人あいさつしたよ。
b {生徒} が先生に十人あいさつしたよ。

したがって、「生徒が」の直後にはめこまれた場合だけでなく、「先生に」の直後にはめ込まれた場合にも、「十人」は「生徒」と結びつくと解釈されうるのである。そのため、(18)の「生徒」が「十人」という解釈が補強されるのである。これは、G格の方が二格よりも、遊離されたQと結びつけやすい、つまり、QFがはたらかやすいためであろう。

一方、「Qノ」という形にすると、「生徒」と「先生」の両方にかかりうる。ただし、この場合も、文末に近いNPにかかる解釈の方が強い。

- (21) a 生徒が先生にあいさつしたよ、十人の。
b 先生に生徒があいさつしたよ、十人の。

例を加えておこう。

- (22) a 女の子が男の子にチョコレートをあげたよ、五六人／五六人の。
b 男の子に女の子がチョコレートをあげたよ、五六人／五六人の。
(23) a トラックが自動車に衝突したよ、五台／五台の。
b 自動車にトラックが衝突したよ、五台／五台の。

対称格、共同格の場合は後置されたQが主語に結びつくことがよりはっきりする。

(24) ゲリラが兵士と戦っているよ、四五人。

(25) 男性が女性と踊ったよ、三人。

(24)(25)を正置文に直すと

(26) ゲリラが兵士と四五人戦っているよ。

(27) 男性が女性と三人踊ったよ。

のようになる。これらは、(26)(27)のQは、ト格をとるNPから遊離されたものとしては解釈できないが、(20)で二格についてみたのと同様、主語からのQFとしてなら解釈できる。

(28) a *ゲリラが{兵士}と四五人戦っているよ。

b {ゲリラ}が兵士と四五人戦っているよ。

(29) a *男性が{女性}と三人踊ったよ。

b {男性}が女性と三人踊ったよ。

一方、「Qノ」を後置した場合は、二格の場合と同様である。

(30) ゲリラが兵士と戦っているよ、四五人の。

(31) 男性が女性と踊ったよ、三人の。

以上のように、後置されたQがどのNPと結びつくかは、QFの可否と密接に結びついている。すなわち、後置されたQはQFを許すNPの直後にはめ込まれるのである。このことは、次のようにヲ格と二格がある場合を考えれば、さらに明確になる。

(32) 太郎は男性を女性に紹介したよ、四人。

(32)では後置されたQ「四人」はヲ格をとる「男性」と結びつくように解釈される。ここで、Qをはめ込む位置としては次の二通りが考えられる。

(33) a 太郎は男性を Pro 女性に紹介したよ、四人。

b 太郎は男性を女性に Pro 紹介したよ、四人。

実際に Pro を「四人」でおきかえてみると、

(34) a 太郎は男性を四人女性に紹介したよ。

b 太郎は男性を女性に四人紹介したよ。

(34)はいずれも、ヲ格からのQFの結果として解釈できるが、二格からのQFの結果としては解釈しにくい。つまり、「四人」は(33)のどちらのProの位置にはめ込まれても、ヲ格をとる「男性」と結びつくとは解釈されるのである。また、「Qノ」は、前の例と同様である。

(35) 太郎は男性を女性に紹介したよ、四人の。

次も同様。

(36) a 花子は猫に魚をあげたよ、三匹／三匹の。

b 太郎はボールを鬼の面にあてたよ、四つ。

では、次のようにガ格とヲ格がある場合はどうだろうか。

(37) a 男の子が女の子をいじめたよ、三人。

b 女の子を男の子がいじめたよ、三人。

(37)aの「三人」は「男の子」と「女の子」のどちらにも結びつけられる。bのように語順を入れかえても同じである。ただし、直観的には、「女の子」を「三人」という解釈の方が強いように感じられる。これは、ガ格よりもヲ格の方がQと結びつけやすい、言い換えれば、ヲ格の方がガ格よりもQFが働きやすいためであると考えられる。一方、「Qノ」の場合も、「男の子」と「女の子」の両方にかかりうる。ただし、外のノ句同様、文末に近いNPにかかる解釈の方が強い。

(38) a 男の子が女の子をいじめたよ、三人の。

b 女の子を男の子がいじめたよ、三人の。

同じような例をあげよう。

(39) a 平社員が上役をうらんだよ、五人／五人の。

b 上役を平社員がうらんだよ、五人／五人の。

(40) a 刑事が犯人を逮捕したよ、十人／十人の。

b 犯人を刑事が逮捕したよ、十人／十人の。

移動格の場合も同じようにガ格とヲ格の両方のNPに結びつきうるように解釈される。

(41) a 部隊が橋を渡ったよ、三つ／三つの。

b 橋を部隊が渡ったよ、三つ／三つの。

(42) a 隊商が山を越えたよ、二つ／二つの。

b 山を隊商が越えたよ、二つ／二つの。

このように、後置されたQがかかりうるNPが複数ある場合には、QFが働きやすい方のNP(すなわち、二格よりもガ格、ガ格よりもヲ格をとるNP)にかかるように解釈されるのである。

3.3.2. 単文中にQが二つある場合

まず、次のように、一つの文からいくつかのパターンを作ってみよう。

(43) a 三人の男の子が四人の女の子をいじているよ。

b 三人の男の子が女の子をいじているよ、四人／四人の。

c 男の子が三人女の子をいじているよ、?四人／四人の。

d *男の子が四人の女の子をいじているよ、三人／三人の。

e *男の子が女の子を四人いじているよ、三人／三人の。

上の結果から、ProとQの間に別のQがあってはならないという制約があると予測できる。つまり、たと

えば (43 d) では、

(44) a *男の子が Pro_i 四人の女の子をいじめているよ、三人_i。

b *Pro_i 男の子が四人の女の子をいじめているよ、三人の_i。

ここでは Pro_i と「三人_i/三人の_i」との間に、別の Q「四人の」があるために、不適格になっていると考えられるのである。この制約を形式的に書くと、

(45) * ……Pro_i ……Q_j …… , Q_i

となる。次の例はこの予測をうらづけている。

(46) a 五人の女の子が六人の男の子をなぐったよ。

b 五人の女の子が男の子をなぐったよ、六人/六人の。

c 女の子が五人男の子をなぐったよ、[?]六人/六人の。

d *女の子が六人の男の子をなぐったよ、五人/五人の。

e *女の子が男の子を六人なぐったよ、五人/五人の。

だが、次のような例、特に(47)の d 文のうち「三人」を用いた方(47 d)-1としよう) はどのように考えればよいだろうか。

(47) a 三人の若者が二人の芸者にほれたよ。

b 三人の若者が芸者にほれたよ、[?]二人/二人の。

c 若者が三人芸者にほれたよ、^{??}二人/二人の。

d *若者が二人の芸者にほれたよ、三人/三人の。

e *若者が芸者に二人ほれたよ、三人/三人の。

(47 d)-1では、後置された「三人」と、それが結びつくと考えられる「若者」との間に別の Q「二人」がはさまっている。にもかかわらず、適格文なのである。まず、次のような文を考えよう。

(48) {若者} が花子に三人ほれたよ。

3.3.1.の(18)でも示したが、主語から遊離した Q は、二格の後におかれても、主語を領域とすることができる。このことは、二格をとる NP が Q を含んでいても、成り立つ。

(49) {若者} が二人の芸者に三人ほれたよ。

つまり、(47 d) - 1 の場合も、

(50) a 若者が Pro 二人の芸者にほれたよ、三人。

b 若者が二人の芸者に Pro ほれたよ、三人。

「三人」は(50) b の Pro の位置にはめ込まれて、「若者」と結びつけられるのであり、(49)の制約を犯していないのである。

次に (47 d) の二文のうち「三人の」を用いた方((47 d)-2とする) が不適格となる理由を考えよう。

(51) *若者が二人の芸者にほれたよ、三人の。

(=(47 d)-2)

3.3.1.でみたように、「Qノ」は文末に近い NP の方が結びつけやすいという priority はあるが、非後置部分中のいずれの NP にもかかりうる。したがって(51)は次の二通りの解釈があるはずである。

(52) a Pro 若者が二人の芸者にほれたよ、三人の。

b 若者が Pro 二人の芸者にほれたよ、三人の。

(52)の構造は形式的に書くと次のようになる。

(53) Pro_i ……Q -no_j …… , Q -no_i

したがって、3.2.2.でみたノ句に対する制約

(54) * ……Pro_i ……no-ph._i …… , no-ph._i

を「Qノ」まで拡張するか、あるいは本節でみた Q に対する制約

(55) * ……Pro_j ……Q_i …… , Q_i

の「Q」を「Qノ」まで拡張するかのいずれかによってブロックできる。((47 e)は二格からの後置がおきているために非後置部分で不自然な文が生じているので考慮からはずす。)

最後に、ト格(対称格)についても同様のことが言える。

(56) a 三人のゲリラが五六人の兵士と戦っているよ。

b ゲリラが五六人の兵士と戦っているよ、三人。

二格と同様、主語から遊離された Q はト格の直後におかれても主語と結びつけられる。

(57) {ゲリラ} が五六人の兵士と三人戦っているよ。しかも、ト格は QF を許さないため、ト格の直後の位置は常に「あいて」いる。

(58) *ゲリラが {兵士} と五六人戦っているよ。

それゆえ、(56 b)の「三人」はト格の直後にはめ込まれ、主語を領域とすることができるのである。

(59) ゲリラが五六人の兵士と Pro_i 戦っているよ、三人_i。

なお、主語から遊離された Q はヲ格の直後におくことができない。

(60) a 十人の生徒が花子を助けたよ。

b * {生徒} が花子を十人助けたよ。
(43 d) と (47 d), (57 b) の許容度の差は、このことに起因する。

- (61) a * 男の子が四人の女の子をいじめているよ、三人。(=(43 d))
b 若者が二人の芸者にほれたよ、三人。(=(47 d)-1)
c ゲリラが五六人の兵士と戦っているよ、三人。(=(56 b))

すなわち、(61 b, c) では後置された Q をそれぞれ二格、ト格の直後にはめ込んで、主語と結びつけることができるのに対し、(61 a) では、ヲ格の直後にはめ込んでも主語と結びつけられないからである。

- (62) * {男の子} が四人の女の子を三人いじめているよ。

以上のように、Q が二つある場合、(48) の制約が働く。

- (63) * ……Pro_i ……Q_j ……, Q_i (=(48))

そして、Q が二つある場合にも、後置の可否は、QF の可否と深く結びついている。つまり当該の Q が、どのような文法関係にある NP に含まれているか (主語、直接目的語など)、あるいはどのような表層の格をとっているかということであり、基本的には Q が一つの場合と同じなのである。

4. むすび

以上、単文中のいくつかの要素について、後置の可否および後置に対する制約を考察した。包括的な観察とは言えないが、それでも、興味深いトピックが浮かび上がってきたと思う。

最後に一言付け加えておきたいのは、これまで、さかんに「後置する」という表現を用いてきたが、そのことによって、後置要素が移動変形によって文尾におかれたということの意味しているわけではないということである。井上 (1978) では日本語の右方転移に関して次のように述べている。

……日本文で述語の後に現われうる要素は終助詞ぐらいのものなので、構造上のパラレルを求めることができない。したがって…… (中略) ……右方転移される句を深層構造に生成しておくことはできない。また、右方転移を仮定することは述語の後への唯一のケースになり、望ましくない。そこで、ここではこれを文の部分的な繰り返しと考えることにする。(p.99)

久野 (1978) も井上の議論をふまえ、同文並置構造から後置文を生成することを提案している。生成過程に関してはまだ不明な点が多いので、ここではこれ以上の議論は避けるが、とにかく、後置文と正置文を移動変形によって結びつけることは、井上の議論の指摘する通り、好ましくない。したがって、ここでは井上の議論に従い、後置要素を文の部分的な繰り返しと考え、上で述べた制約は、Pro と後置要素を結びつける解釈規則に対する制約であるとしておきたい。生成プロセスの問題も含め、後置文については、まだ研究されていない部分が多い。今後は従属節を含む文も視野に入れて、考察していきたい。

<注1> ① '奥さんが私の鍵をなくしたのよ、田中さんの。

①は(20 b)よりも許容度が高い。(20)では、「田中さんの奥さん」「鈴木さんの鍵」と、どちらも三人称に関する事柄だが、①では一方が「私の鍵」という一人称にかかわる事柄である。許容度の差はこの点——視点というべきか——に起因すると考えられるが、詳しい点は不明である。今後の課題としたい。

<注2> このNP P Q パターンの Q の後置について考えてみよう。たとえば、

- ① 太郎が本三冊を買ったよ。

の「三冊」が後置できたとする、

- ② 太郎が本を買ったよ、三冊。

となるが、これは、次の文の「三冊」を後置した場合と同形になる。

- ③ 太郎が本を三冊買ったよ。

だが、②のような文を聞いた時、「三冊」をはめ込む位置としては直観的に次の三つのうち、Pro₃ か Pro₁ が妥当であると感じられる。

- ④ 太郎がPro₁本Pro₂をPro₃買ったよ、三冊。

一方、Pro₂の位置にはめ込むようには感じられない。

奥津 (1969, 1983) が指摘するように、NP Q P パターンのNPとQは一種の同格構造をなすと考えられる。一般に同格構造中の要素は後置しにくいようである。

- ⑤ a 有名な言語学者チョムスキーが来日したよ。

b ?? チョムスキーが来日したよ、有名な言語学者

したがって、Qを含まない同格構造の場合と同様、①の「三冊」は後置できない、すなわち、②は③の「三冊」が後置されたもの、とみるべきであろう。このように考えれば、④についての直観も説明できる。なお、⑤はノ句の形になれば後置できる。

⑥ チョムスキーが来日したよ、有名な言語学者の。

<注3> Harada (1976) では、QFは表層の主語からだけでなく、“cyclic subject”——つまり、ある文を生成する過程の中のあるサイクルの終りにおいて主語だったNP——からも可能であるとしている。

<注4> (30)(31)について語順をいれかえると、次のように等位構造と同形になる。

① a 兵士とゲリラが戦っているよ、
四五人。

b 女性と男性が踊ったよ、三人。

これは、それぞれ、「兵士とゲリラ」が合わせて四五人、「女性と男性」が合わせて三人と解釈する。興味深い現象だが、議論の本筋からはずれるので、ここでは扱わない。

<注5> この文が不自然なのは、もとなる正置文

① ?男の子が三人女の子を四人いじめているよ。

がすわりの悪い文であるためだろう。このように同じ文の中でQFが二回起こると不自然な文が生じるようである。

<注6> この文は「六人の男の子」のうち「五人」

をいじめたという意味(奥津(1983)のいう「部分数量」)であれば適格である。

<注7> この文も「三人の若者のうち二人がほれた」という部分数量の意味を表す文としては適格である。

参考文献

- 井上和子1978 『日本語の文法規則』大修館
 奥津敬一郎1969 「数量的表現の文法」『日本語教育』14
 —————1974 「生成日本文法論」大修館
 —————1978 「『ボクハ ウナギダ』の文法——ダ
 とノ——」くろしお出版
 —————1983 「数量詞移動再論」『人文学報』46.160
 東京都立大学人文学部
 Kamio, A.1973 “Observations on Japanese Quantifiers” Decriptive and Applied Linguistics vol.6 ICU pp.69~92
 神尾昭雄1977 「数量詞のシンタククス」『言語』6:8
 pp.83~91
 久野暁1978 『談話の文法』大修館
 柴谷方良1978 『日本語の分析』大修館
 Tomoda, S.1982 “Analysis of quantifiers in Japanese” Coyote Papers vol.3 University of Arizona pp.145~160
 Harada, S. I.1976 “Quantifier Float as a Relational Rule” Metropolitan Linguistics 1 pp.44~49
 松下大三郎1928 『改撰標準日本文法』中文館(覆刻(1974) 勉誠社)
 (東京都立大学大学院学生)

文章における意味の接続

平澤 洋 一

1. 文接続の方法

文章には、さまざまな「意味」が集まっている。文章は、数多くの語句、文、段落といった接続対象の集合であり、それらの有する「意味」の集合体とみることができる。従って、文章の「意味」の総体を把握するには、すべての接続対象に関する接続の方向と接続の方法を扱えばよい。

接続の方向としては、順接、逆接、並列、添加、選択、転換、補足、まとめ、比較、例示、同内容、対立、連想などがある。同内容型には、指示語型、代名詞型、同一語型、文反復型、類概念型、代入型などを考慮する必要があるようだ。この同内容型というのは、接続する対象の前項の「意味」と同一またはきわめてそれに近いものを後項が受ける形で接続していく場合をい